

音声表出のない児童へのコミュニケーション支援

原 恵一

1. はじめに

音声表出のない障害児のコミュニケーション支援として、AACによるアプローチは欠かせない。教育現場でも、AAC手段が日常的に導入されてきており、その有効性が多く報告されている。AACの技法には、以前から使われてきた身振りサインや写真、図形シンボルから、近年、注目されているVOCA（音声出力コミュニケーション補助装置）や、コンピュータ等のハイテクノロジーを活用したようなものなど多くの選択肢がある。

本研究は、知的障害をもち音声表出のない女児に対しコミュニケーションの拡がりを目指して行った実践の経過について検討する。

2. 方法

(1) 対象児

M児：小学部1年生女児

【発達検査】

KIDS (CA 6 : 2時) 総合発達年齢 1 : 2

領域	運動	操作	理解言語	表出言語	概念	対子ども社会性	対成人社会性	しつけ	食事
発達年齢	1:8	1:8	1:2	0:3	0	1:7	1:0	1:9	1:0

【コミュニケーションの実態】

主な伝達手段は「指さし」で、要求・叙述・応答など様々な機能で使っているようである。「指さし」にともなう視線は、指をさした物(人や音のした方向に指さすことも多い)に対して見られ、他に聞き手としての大人に対して視線を向ける行動も見られる。さらに、大人に対して注意喚起(腕などを叩く、触る)をした後に指さしをする行動も見られる。他に伝達行為としての身振りとしては、「首を振る(YES/NOを表す)」や給食の時間などに大人から(M児の行動に対して)否定的なコメントを受けたときに隣に座っている大人(コメントした大人ではなく)を「つねる」行動が見られる。音声は、喃語(2音節程度 特に快の情動の時に見られる)のみである。

(2) 手続きと経過

①使用したAAC手段とM児の様子 (○数字) 具体的な導入場面 (→) M児の行動

	写真カード	絵・シンボル	身振りサイン	VOCA
	①クラスの児童(2名)と教師の顔写真を朝の会の名前呼びの時に使用開始(4月)	①M児の使用する名前カードやフック、机等に「ミッキーマウス」のシールをマークとして使用開始(4月)	①授業のあいさつ(起立・気をつけ・礼・着席)を「身振り+音声」で使用(4月~6月)	①授業のあいさつ(起立・気をつけ・礼・着席)にStep By Stepを使用開始(6月)

1 学 期	<p>→自分の顔写真の下に 名前カードを貼る</p> <p>② M 児の母親と妹の 顔写真を教室の黒板 に設置 (5月) →教師を見ながら写真 を指さす</p>	<p>→自分の顔写真の下に 名前カードを貼る</p> <p>②絵と文字による予定 カードを使用 (4月) →特に関心は示さない</p>	<p>→「起立」「気をつけ」 「着席」に対しては 号令に従う</p>	<p>→すぐに Step By Step に興味を持ち M 児の前に差し出 すとボタンを押し音 声が出るのを楽しん でいる様子うかがえ る また、音声に対して 動作での反応も見ら れた</p>
9 月	<p>③写真と文字による予 定カードを使用 →写真の部分に関心を 示しカードの写真の 部分を指さす</p> <p>④朝の活動と給食後の 活動について写真 カードを使って個別 スケジュールを教室 に設置 →興味を示し、トラ ンジッションエリア からカードを取り各 活動場所へ移動する ようになる</p> <p>⑤よく使用する活動場 所の写真カードが 貼ってあるミニホ ワイトボードを設置 →カードに興味を示 しよく指さしている</p>	<p>③給食の予定カードに シンボル (PCS: 食べる) と文字を使用 →シンボルを見てス プーンですくう動作 をする</p> <p>② →外遊びの予定カ ードの絵 (ブラン コ) を指さして後、 外のブランコの方 を指さす</p>		
10 月	<p>⑥朝の会で名前呼びで 使用する Mini-Message -Mate のオーバー レイに顔写真 (児 童 2 教師 2) を 使用開始 →プロンプトを与 えると M 児本人 と N 児の写真は ほぼ正確に押す</p>		<p>②マカトンサインを参 考に身振りサイン を使用 → (表 1 参照)</p>	<p>②朝の会で名前呼 びのときに Mini- Message-Mate を使用開始 →興味を示しほ ぼ毎朝使用した がる自分の名前 が聞こえると手 をあげる</p>
11 月	<p>⑥ →教師の写真も正 確に押すように なる</p>	<p>④プレイルームに遊 びに行く際、プレ イルームのシンボ ルカードを指さし て「プレイルーム に遊びに行くよ」 という音声を付 随させるように した →喜びの表情を示 しプレイルームに 向かう →教師の顔を見 ながらシンボル を指さす</p>		

②使用した身振りサイン

表1 使用した身振りサインとM児の使用状況(12月現在)

身振りサイン	M児の使用状況	身振りサイン	M児の使用状況
起立	観察なし	よい	観察なし
気をつけ	文脈の中で見られる	牛乳	不完全な模倣
礼	観察なし	遊ぶ	観察なし
着席	観察なし	歌	観察なし
おしまい	観察なし	今	観察なし
ない	観察なし	次	観察なし
ちょうだい	自発的に使用	寝る	不完全な模倣

③インリアルによるビデオ分析

11月25日に、担任とM児との間のコミュニケーションについてビデオ分析を行った(トレーナーとして金沢大学教育学部大井学教授が参加)。分析では、以下のことが指摘された。

- ・M児に対して教師の与える情報量が多い(言葉数が多い、数種の伝達手段を同時に使用)
- ・M児に対して教師の待ち時間が短い
- ・M児に対して教師の反応があいまいである
- ・教師の話し言葉に対してM児の反応があまり見られない

④朝の会におけるM児の伝達行為の様子より

他の活動に比べ毎回人的・物理的環境、活動内容にあまり変化のない朝の会の様子を毎月ビデオに記録した。9月18日、10月15日、11月6日、12月15日の計4回の記録からM児の伝達行為について(表2)の基準に従って分類を行った(図1)。

伝達行動の総数を見ると11月6日が少なく12月15日が多い。前者については、当日の目課の関係で朝の会が普段より半分程の短い時間であったことが1つの要因と考えられる。また、伝達行動のほとんどがM児から開始されている。

伝達手段別に見ると、写真カード、絵・シンボルに関しては、使用は少なくあまり変化は見られなかった。身振りに関しては、他の伝達手

表2 伝達行為のカテゴリと定義

写真カード	カードの提示または指さし
絵・シンボル	カードの提示または指さし
身振り	指さし リーチング クレーン 相手を叩く・触る 手を引っ張る 頭をふる(上下・左右) 身振りサイン その他(押す等)
VOCA	VOCAのスイッチを押す (プロンプトがある場合も含む)
音声	発声すべて

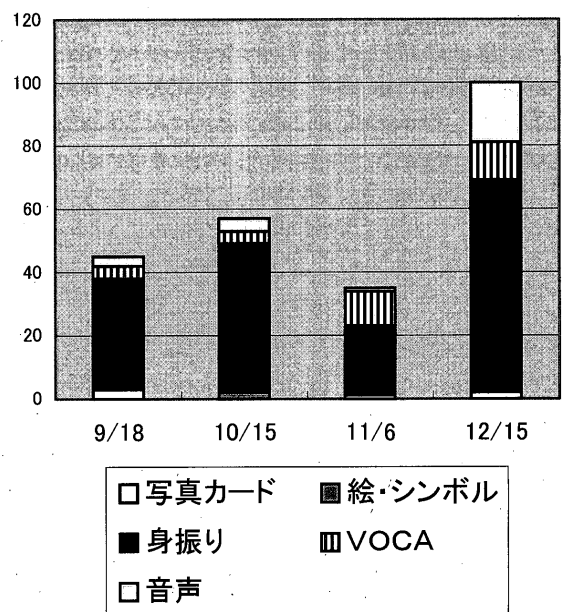


図1 M児の伝達手段の使用数

段に比し圧倒的に多いが、その中に身振りサインはあまり見られなかった。また約30パーセントが注意喚起を意図した身振り（叩く、触る、手を引っ張る）であった。VOCAについては、半数以上はプロンプトなしで使用しており、ビデオの様子からもVOCAへの興味関心がうかがえた。音声は、主に他の伝達手段に伴って表出することが多かった。12月15日には、音声の表出が増えている。

3. 考察

今年度、特に2学期に入り各伝達手段についてM児の学校生活の中に導入を試みてきた。11月6日以前と12月15日では、音声の表出の増加と身振りの種類の増加（12月15日には、それ以前に見られなかった拍手や身体の一部への指さしなど）があった。また、新しく導入を試みた手段がすぐに自発的に使用されることはなかったが、12月15日には、音声と身振りの使用数が飛躍的に増えている。このことは、11月25日のビデオ分析での指摘により担任のM児に対するコミュニケーションの姿勢が変化したことが1つの要因として考えられる。教育現場においては、先生の指示に応じられるようになることが目標になりがちであり、結果的に子どものコミュニケーション意欲を抑えてしまう傾向にある。このことから、子どもにとっての重要なコミュニケーション環境としての大人の基本姿勢が子どものコミュニケーション意欲に影響を与えていると言える。

10月に使用を開始した身振りサインについては、12月現在においては、ほとんど見られていない（表1）。このことは、身振りサインがM児の現在のコミュニケーション・ニーズにマッチしていないこと、サインの意味付けが未達成であることが考えられる。

4. おわりに

本研究では、音声表出のない児童に対してAAC手段の導入を行ってきたが、教師の主観的な判断によってAACの導入が行われたことにより、スムーズにAAC手段を獲得することが困難であったと考えられる。それに対し、本実践の中で行ったインリアルビデオ分析は、M児のコミュニケーション意欲を高めることにつながったと考えられる。これをきっかけに、今後も定期的にビデオ分析を行い、M児のコミュニケーション環境の改善、コミュニケーション・ニーズの把握を行っていききたい。そして、M児のコミュニケーション・ニーズを知ることによって、適切なAAC手段導入の方法について探っていききたい。そのことが、さらなるM児のコミュニケーション意欲の高まり、M児が自分にあったAAC手段を自ら選択していくこと、コミュニケーションの拡がりへとつながっていくことを期待している。